

旧梓小学校記録保存調査報告書



令和 7 年 3 月

松 本 市 教 育 委 員 会
公益社団法人長野県建築士会

例 言

- 1 本書は令和6年4月から令和7年3まで行われた、「旧梓小学校」の解体前調査報告書である。
- 2 松本市教育委員会から公益社団法人長野県建築士会が委託を受け、長野県建築士会松筑支部が調査を実施した。
- 3 調査は「旧梓小学校三号校舎」の建築及び史料の調査を行い、記録保存を目的に実施された。
- 4 掲載の写真については、特記のないものは調査者の撮影による。
- 5 調査担当者・写真撮影担当者・執筆担当者は以下のとおりである。
 - ・建物調査及び写真撮影(五十音順)
山田健一郎 赤羽直美 野口大介 長谷川繁幸 小笠原み江 川島智隆
 - ・報告書作成(図面作成含む)
野口大介 赤羽直美 川島智隆
- 6 本書の作成に当たり、次の方々、団体からご指導、ご協力を賜った。
松本市梓川公民館

凡 例

- 1 本文の用語は、現代仮名遣い、常用漢字を原則とした。ただし、固有名詞・専門用語と、一部特別な表現については、その限りではない。
- 2 本文の寸法標記は、原則としてメートル法を用いた。
- 3 年号は原則として和暦年号を用い、西暦年号を()書きで併記した。

目 次

位置図

口 絵

例 言

凡 例

1	調査の目的と概要	
	(1)調査の目的	3
	(2)調査の概要	3
2	敷地の概要	3
3	沿革	
	(1)小学校の沿革	5
	(2)後利用	8
4	配置と建築の特徴	
	(1)敷地と建築の構え	10
	(2)建築の特徴	14
5	建設関係者	20
6	まとめ	21
7	参考文献	21
8	写真	
	(1)資料より	22
	(2)調査時	23
図 面		32
資 料		33

1 調査の目的と概要

(1) 調査の目的

旧梓小学校三号校舎は昭和 12 年(1937)から梓川小学校開校により梓部校が閉校した昭和 48 年(1973)まで、36 年の余り、親しみある校舎として利用された。その後も旧梓小学校三号校舎は保育所や、日本フェンオールの子川工場として活用された。空き校舎となった現在、老朽化により近年取り壊される予定のため、建物の現況と当建築の歴史を記録保存する方針となった。

本調査では、長年小学校の校舎として愛され、後に工場として活用された近代の木造学校校舎について現況を調査し、資料を収集、記録した。

(2) 調査の概要

調査対象の概要

名 称	旧梓小学校（三号校舎）
員 数	1 棟
所 在 地	松本市梓川梓 2 3 4 8 番地 6
構造/形式及び 建築面積 令和 6 年調査時	木造/瓦葺 地上 2 階 建築面積約 1263 m ² (校舎) 建築面積約 240 m ² (工場増築部)
所 有 者	松本市
建設年/大規模改修等年	昭和 12 年(1937)／昭和後期

本調査は、松本市教育委員会文化財課の発注にて、公益社団法人長野県建築士会が受託、長野県建築士会松筑支部が調査を実施し、令和 6 年（2024）4 月から令和 7 年（2025）3 月の間に、現地確認及び写真撮影、史料収集を行い、まとめたものを印刷物およびデジタルデータ(DVD)で納品した。史料収集は、松本市立博物館、松本市立図書館、松本市文書館、国会図書館デジタルライブラリーを主として行った。

2 敷地の概要

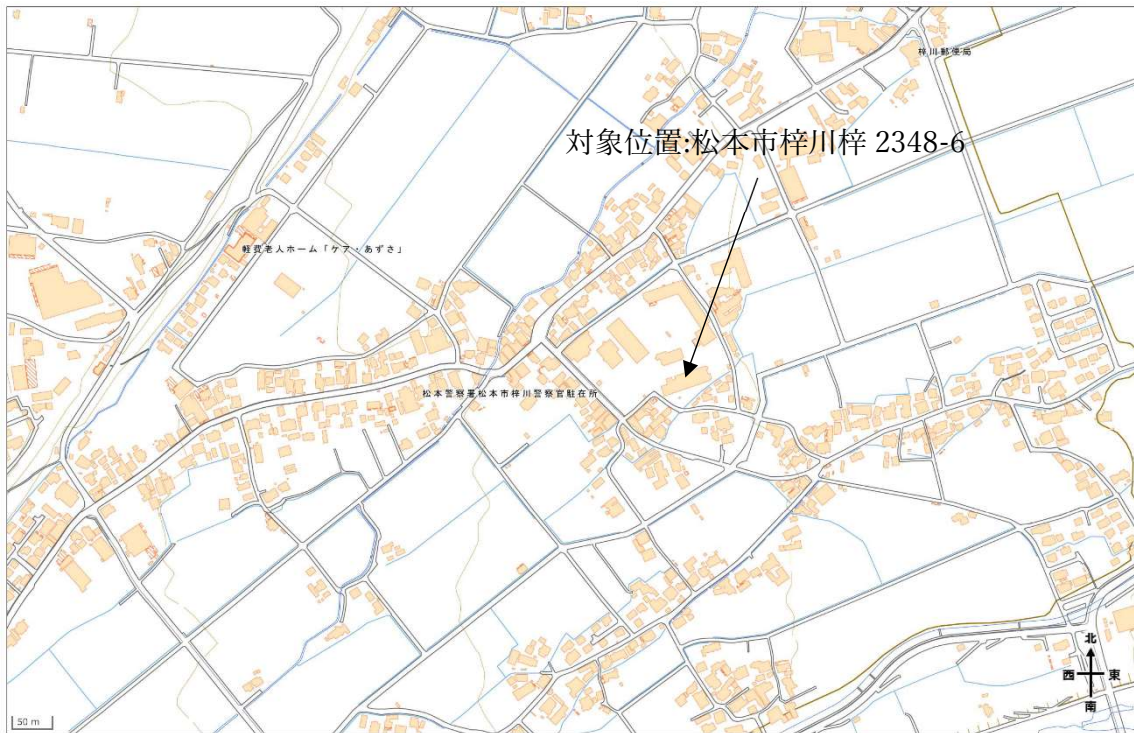
松本市梓川地区は松本市の西部に位置し、西に黒沢山(2,051m)、天狗岩(1,964m)、金比良山を結ぶ尾根、北は北黒沢の山地と安曇野市に接し、南には梓川がある。地区面積が 42.6k m²、その 53%が山林である。残りが三段に分かれた河岸段丘で耕地を含め、生活圏となっている。

江戸時代は松本藩領の上野組に属し、明治 7 年(1874)に丸田村・上角影村・下角影村・立田村・杏村・大久保村・北条村・小室村の 8 村を合併して梓村が誕生した。明治 22 年(1889)に梓村に上野村が合併、昭和 30 年(1955)に梓村と倭村が合併して梓川村となり、平成 17 年（2005）には松本市に合併した。特にりんご栽培が盛んで、倭には工業団地を有している。

旧梓小学校のある梓川梓の下立田は、三段に分かれた河岸段丘の二段目、飛騨街道沿いに位置し、明治初期は立田村であった。明治5年(1872)には学校が創立し、梓村となった明治16年(1883)に梓警察署分署が設置。昭和40年代には梓小学校敷地が、県道拡幅により約2/3解体することになった梓川村役場庁舎の立替え候補地にあがっている（実現せず）。現在は、住宅地とともに、付近に梓川支所や梓川西保育園、保健センター、診療所、JA、松本商工会議所梓川支所など公共施設などの集積があり、周辺には水田が広がっている。



航空写真（梓川支所より）



位置図（出典 国土地理院）



現敷地を見る 二号校舎周辺

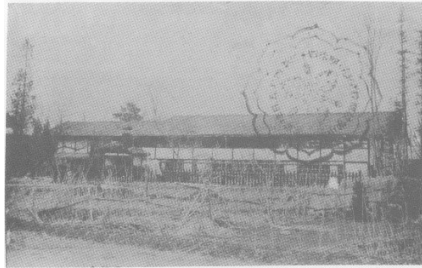


奥に現存する三号校舎をみる

3 沿革

(1) 小学校の沿革

- 明治 5 年(1872) 8 月 南安曇郡第四学区の郷学校として、立田村十輪寺内に^{うん}耘業学校を創立
学制発布と同時に、旧来の寺小屋は閉鎖され姿を消した
立田村では学制発布をまたず小学校創設の準備が進められた
- 明治 7 年(1874)9 月 立田村を含む 8 村が合併して梓村となる
- 明治 7 年(1874)12 月 梓学校開校 移転するに及び郷学校廃止
現敷地内 平屋建、板葺き、紙障子の学校であった



梓学校（現：梓川西保育園の場所） 梓・倭小学校教育の歩みより 以下同様

- 明治 18 年(1885) 北条・角影学校と既に合併していた大久保・丸太学校を加え実質的に統合された梓学校ができる
- 明治 19 年(1886) 梓学校を本校、倭・上野学校が支校、小室学校は派出所とした総合梓学校となる
- 明治 21 年(1888) 小室派出所を簡易小学校に変更する
- 明治 22 年(1889)4 月 梓村に上野村が合併する
梓学校は梓尋常小学校と改称し、小室・上野の両校は分教場となる
- 明治 32 年(1899)1 月 校地 264 坪(約 870 m²程度)を購入し、運動場として整備
- 明治 41 年(1908) 義務教育年限の 6 年の延長に伴う教室不足のため、建設用地 1,600 坪(約 5,300 m²)を購入し、校舎建設に着手
- 明治 43 年(1910) 梓村二ヶ村外組合高等小学校を解散し、梓小学校へ高等科をうつす
梓尋常小学校は、梓尋常高等小学校となる 新校舎が完成
一村単独の学校では、県下稀にみる大規模建築物で、竣工式、開校式には異例なことに県知事代理力石内部部長が臨席した



一号校舎



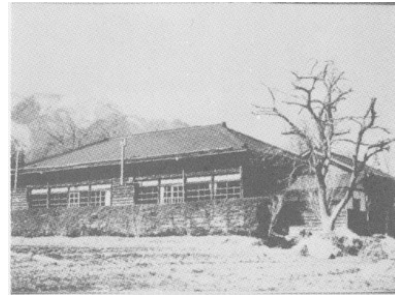
二号校舎

梓尋常高等小学校の概要：校舎 2 階建て 2 棟 総坪数 740 坪(約 2,450 m²)
雨天体操場等平屋坪数 254 坪(約 840 m²)、渡り廊下 60 坪(約 200 m²)
建築費 3 万 5 千円

大正 3 年(1914) 上野分教場校舎新築



大正 3 年(1914) 上野分教場



大正 13 年(1924) 小室分教場

大正 12 年(1923) 梓尋常高等小学校 一号・三号校舎増築、講堂改築

大正 13 年(1924) 小室分教場改築

昭和 12 年(1937) 三号校舎、講堂兼体操場を新築



講堂 木造つり天井式で郡下一の評あり

昭和 16 年(1941)4 月 梓尋常高等小学校は、梓国民学校初等科となる

昭和 22 年(1947)4 月 梓国民学校初等科は、梓小学校に改称

高等科は梓中学校として開校し、応急処置として小学校に併設
玄関正面の校舎(当時の一号校舎)と一号校舎を小学校、三号校舎を中
学用校舎、西幼稚園敷地の校舎を青年学校で使用し、三校が同居した

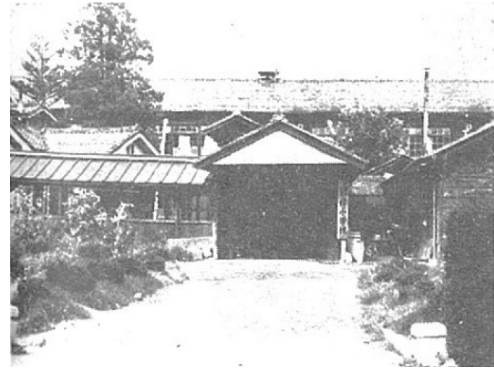
昭和 25 年(1950) 体育館が解体され給食室ができる

昭和 30 年(1955)4 月 梓村と倭村が合併して梓川村となる 梓川村立梓小学校となる

昭和 36 年(1961) 一号校舎南半分(幼稚園、公民館利用部分残す)を解体

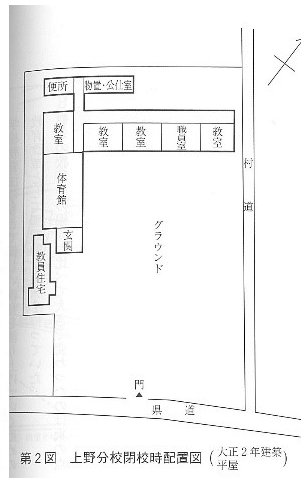
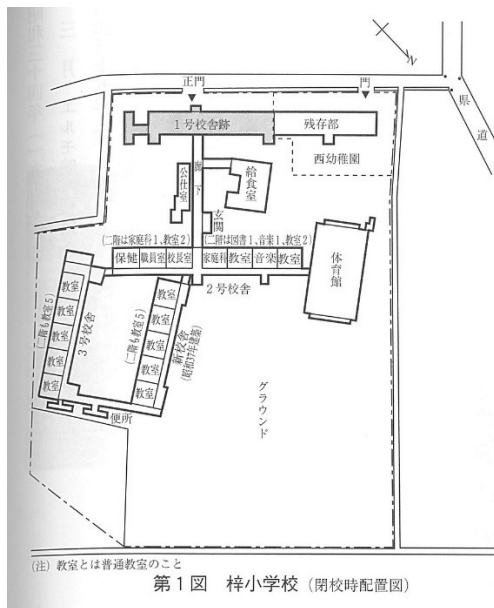
解体材は新築校舎便所、渡り廊下、便所の一部に利用される
上野・小室分校が閉校し、梓小学校へ統合

昭和 37 年(1962) 梓小学校校舎を増築 二号校舎(新校舎)が完成 特殊学級開設

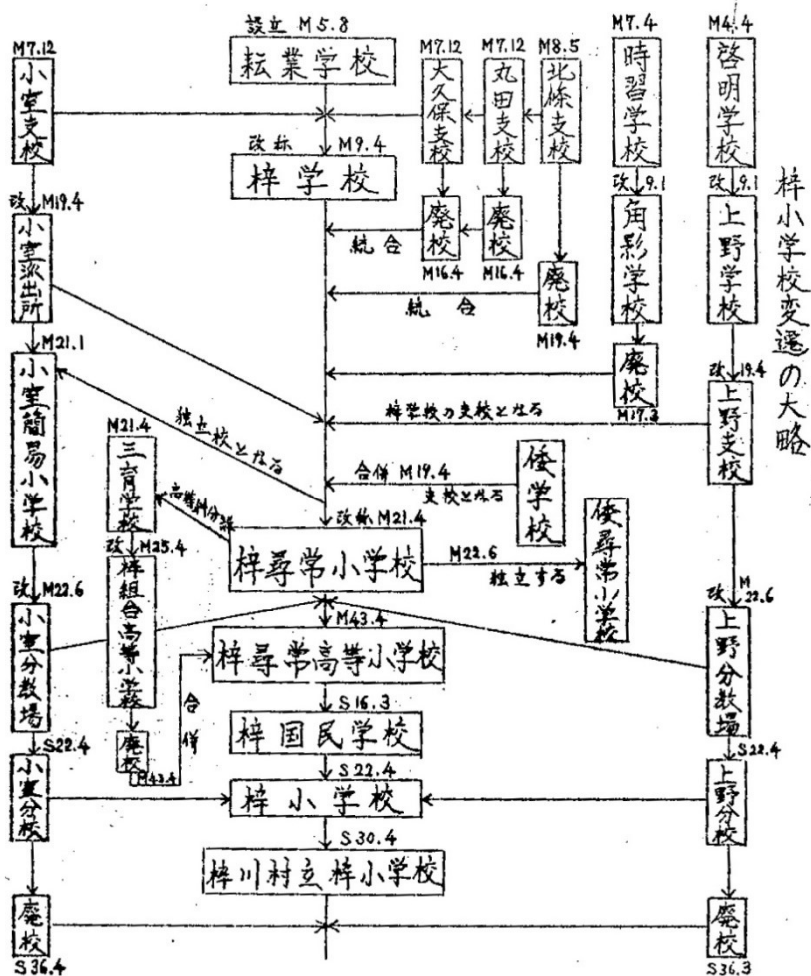


梓小学校全景 S41・小玄関 S42 梓川村公民館報より

- 昭和 44 年(1969) 梓・倭両小学校の統合・一校制が決まる
- 昭和 46 年(1971)4 月 梓小学校と倭小学校が形式統合し、梓川小学校梓部校となる
- 昭和 48 年(1973)3 月 梓・倭部校閉校式
- 旧梓小学校は転業学校以来、101 年の幕を閉じた
- 昭和 48 年(1973)4 月 現：梓川小学校開校 旧梓小学校跡地の一部をあづみ農協へ売却



閉校時配置図 (梓小学校、上野分校、小室分校) 梓川村誌歴史編より



梓小学校変遷略図 S48 倭梓小学校沿革誌（青焼き手製本）より

(2) 後利用

梓小学校の跡地は、西幼稚園（現：松本市梓川西保育園）・農協梓支所（現：JA あづみ梓川支所）、農村公園となり、校舎は2棟残された。

1棟は三号校舎であり、梓小学校閉校以前の昭和22年（1947）から昭和28年（1953）3月まで梓中学校として使用、昭和48年（1973）から通年保育園として使用された。昭和58年（1983）5月から平成9年（1997）まで日本フェノール株式会社へ貸し出され、各種プリント基板組立を行う梓川第一工場として使用された。その後、工場は移転し、現在は空き校舎となり、まつもと市民芸術館（松本市文化振興課）が管理する。

もう1棟は、昭和37年（1962）建築の新校舎である。以後、民俗資料館および村誌編纂室として使用された。民俗資料館は見学の希望があった時に編纂室の職員が案内するような使われ方であった。平成16年（2004）松本市に合併後、民俗資料館保管庫として博物館が管理し、令和3年（2021）に解体された。



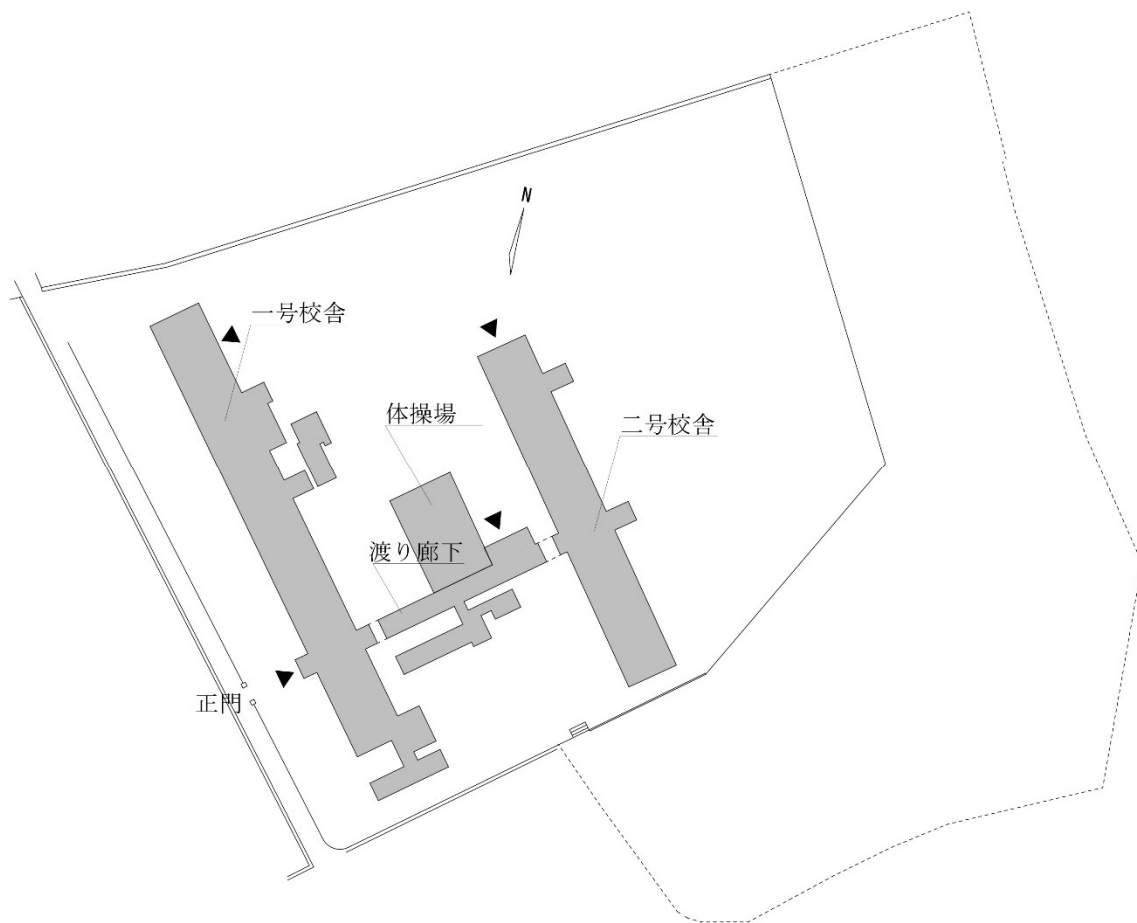
現存する校舎 新校舎と三号校舎(奥) 梓川村誌続編より

4 配置と建築の特徴

(1) 敷地と建築の構え

ここでは、時代の変遷に沿って旧梓小学校がどのように使われ、また生徒の増加や教育方針変換によって施設が増築、改修等が行われたかを記していく。その根拠となるものは、書物や残された資料と共に、旧梓小学校の卒業生である、昭和 16 年(1941)生まれの男性(昭和 23 年(1948)~昭和 29 年(1954)に通学)と昭和 21 年(1946)生まれの女性(昭和 28 年(1953)~昭和 34 年(1959)に通学)から当時学校の様子を伺うことができたので、その内容を踏まえて探ることとした。

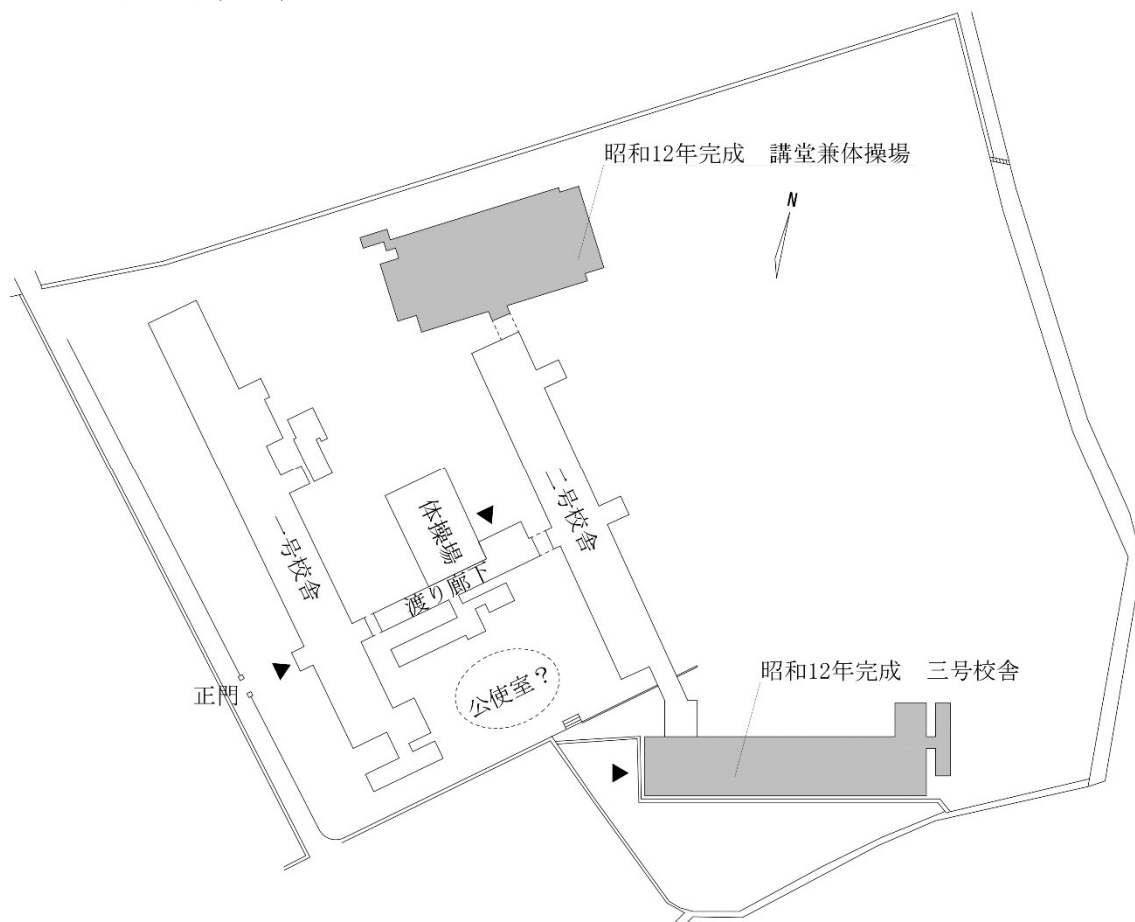
ア 明治 43 年(1910)頃



敷地の南西側に一号校舎、二号校舎(明治 43 年(1910))が並行に配置されている。二つの校舎を結ぶように渡り廊下が配置されている。当時の建設資料から渡り廊下には屋内の体操場付随していた。

この時代には、敷地は閉校時の学校敷地より狭く、その後に敷地が拡張されている。校舎へのアクセスは、当時もこの地域の主要道路であったと推測される現県道より導かれていたと思われる。

イ 昭和 12 年(1937)頃



昭和 12 年(1937)には、元の敷地より拡張され、唯一現存する三号校舎と講堂兼体操場が建設される。この時代における校舎の構成については資料を基に、当時梓小学校に通われていたお二人からの話を伺うことができた。その内容を踏まえ考えていくこととする。

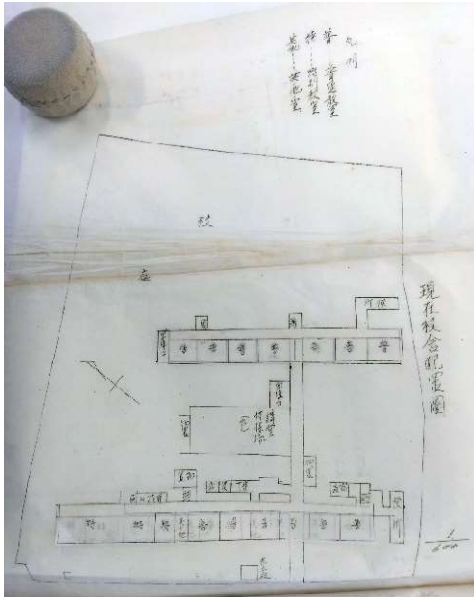
一号校舎は、正門の正面に玄関があり、その横に校長室、職員室が配置されていた。また、玄関とは反対側の西側 2 階には畳の広間があり裁縫室とされていたようだ。

二号校舎は、普通教室が並んでおり小学生が使用していた。

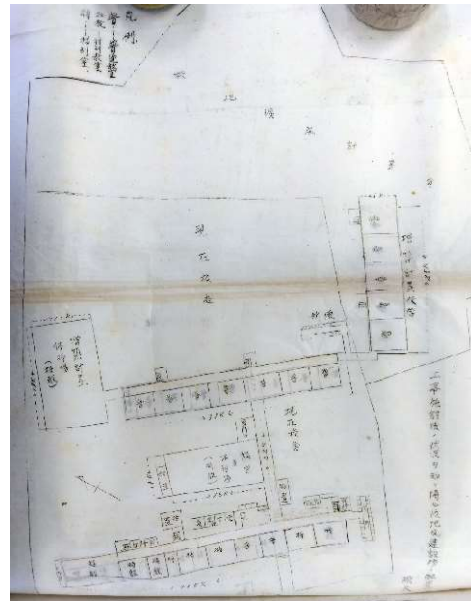
三号校舎は、昭和 16 年(1941)生まれの男性が通学していた時には中学生が使用していたようだ。しかし、その後、男性が卒業するころには梓中学校が完成し、中学生はその校舎に通うことになったようだ。昭和 21 年(1946)生まれの女性が入学した当時は、二号校舎が小学生の教室に変わっていたようだ。

当時、完成している講堂兼体操場は、男性、女性の話では、いずれからも木造でとても大きく立派な建物であったことを語られていた。しかしながら、天井の高さはあまり高くなく、バスケットボール等の球技は、明治 43 年(1910)に建設された体操場で行われていたそうだ。

また、女性からは、渡り廊下東側に昭和 37 年(1962)に建設されている宿直室公使室が、独立の形で当時配置されていた話も聞くことができた。



配置図（昭和12年以前と思われる）



配置図（昭和12年以降と思われる）

ウ 昭和25年(1950)頃

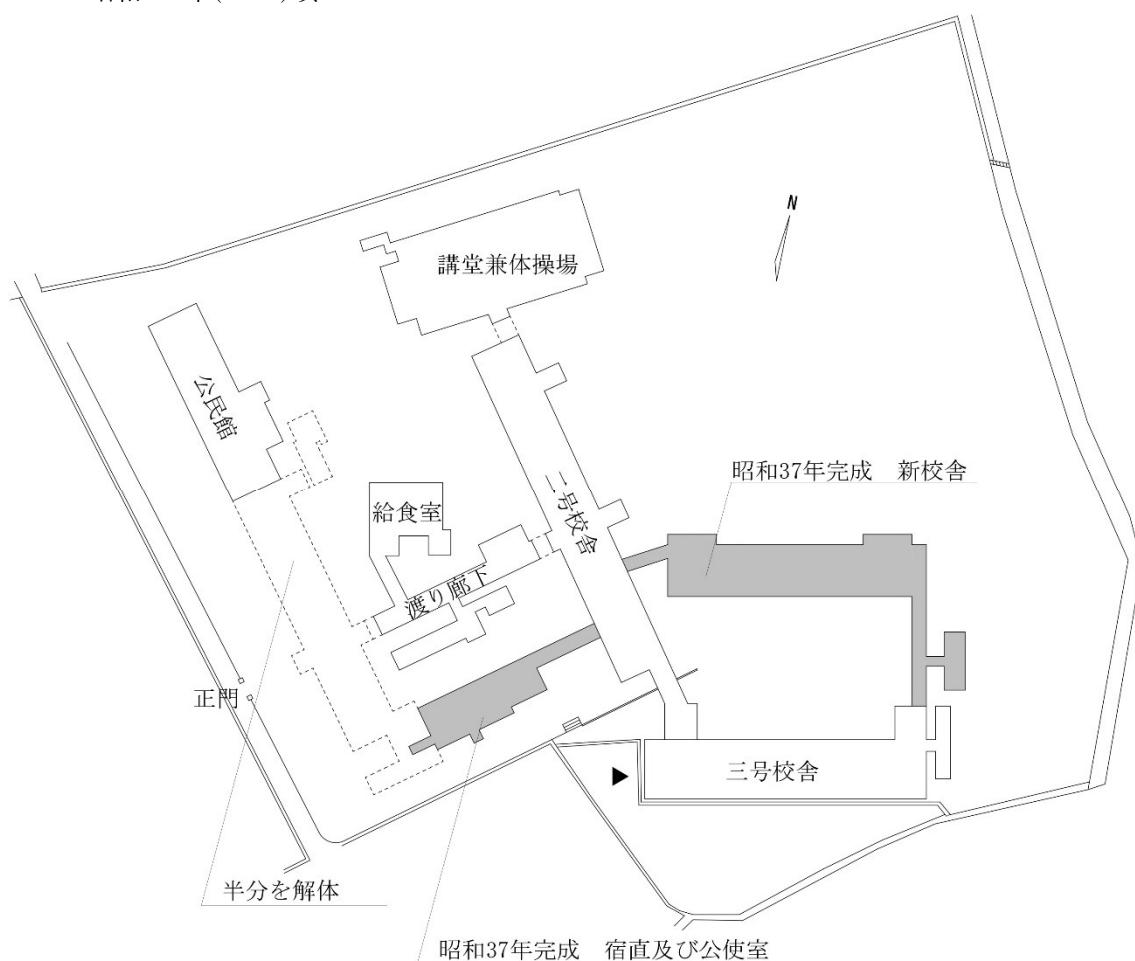


この頃に旧体操場を解体し、その部分に給食室が完成していた記録がある。

しかし、話を伺った二人の話では、男性は給食室があった記憶が無く、通学していた時代には、体操場が存在した記憶のみであった。また、女性は、入学当初から給食があった記憶は無

く、途中より開始された記憶であった。昭和 27 年(1952)4 月の全国の小学校で開始されることに先駆け建設された背景があると考えたが、真偽については不明である。ただし、二人の記憶も 70 年程前の記憶であるために誤差もあると思われる。

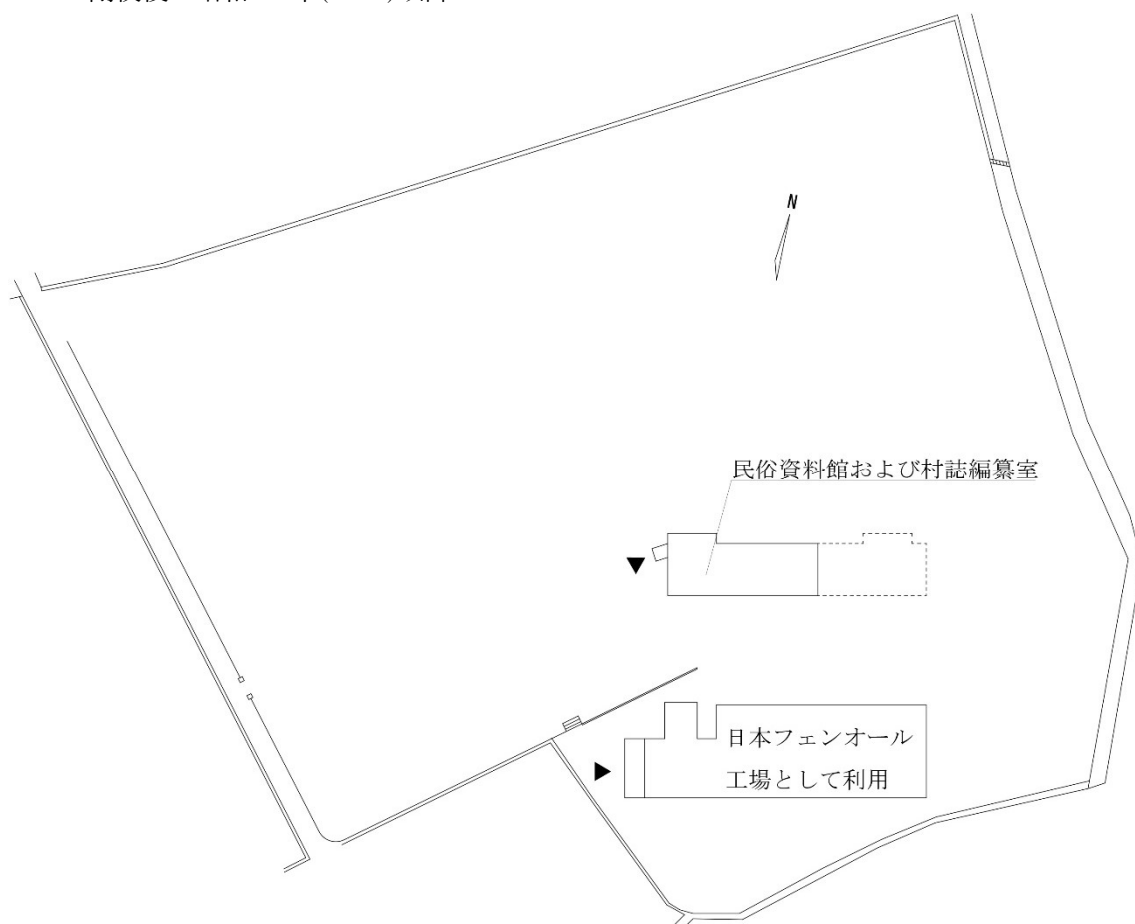
エ 昭和 37 年(1962)頃



この時代には、新しい普通教室棟の校舎が建設され、一号校舎の半分は解体され、残りの半分は公民館・幼稚園として活用されていた。その他、二号校舎には、特別教室や、職員室などが配置され、三号校舎、新校舎を普通教室棟として使用された記録が残る。

梓小学校の配置計画は、生徒の増加に伴い校舎を増築し規模を大きくしてきた。また、状況の変化に伴い、生徒の学習環境の改善を行いながら増築や用途を変えた改修工事が行われてきたと考えられる。

オ 閉校後 昭和 48 年(1973)以降



閉校後は、三号校舎、新校舎を除いて解体され、別の用途の施設が建設され、現在まで活用されてきた。

残された新校舎は民俗資料館および村誌編纂(へんさん)室として利用され、三号校舎は工場として活用されてきた。

また、明確な資料まで確認出来なかったが、民俗資料館等に使用された新校舎は、建設当時の図面と最後解体された時の図面を比較すると、当初の建設時は、1フロア5教室横並びになっていたものが、解体時の図面では、3教室になっていた。よっていずれかの時代に減築をされたものと思われる。

(2) 建築の特徴

ア 三号校舎 昭和 12 年(1937)建設

現存する三号校舎の図面は確認することができなかった。閉校後に工場として利用された三号校舎について現在の状況を確認すると、工場として使用するために東側及び西側に増築が行われていた。内部も一部変更工事や補強工事が行われ、学校として利用されていた時の様子とは変更されている部分が見受けられるが、現在の状況や資料等からわかることを記す。

校舎の外観は屋根を寄棟とし、外壁には一部板張りを模したスレート板が使用されている。その他にも一部板張り及び左官材で仕上げられている。

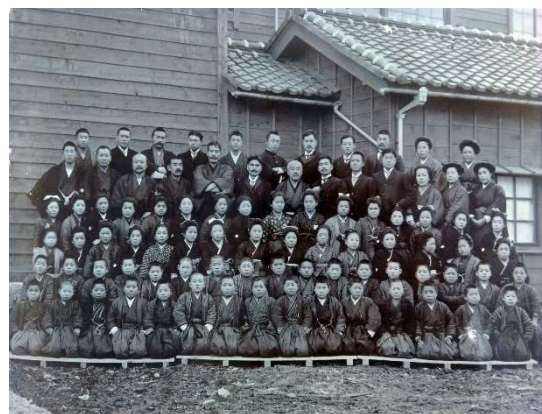
軒天井には板張りが施されている。外壁と軒天に使用された板張りは、現状は白い塗装が施された状態である。恐らくこの板材には、当時から白い塗装が施されていたと思われる。ある

種の和洋折衷建築の造り方の一環だと思われる。塗装は当時のものであるのかについて卒業生のお二人に、当時の状況については話を伺った。しかしながら不明であった。外壁のスレート板については、当時のものであることが、お二人の話から確認ができた。

また、一号校舎、二号校舎の外壁については、当時の写真から共に板張りとなっていたと思われる。三号校舎は、この時代から様式が移り替わったものと思われる。



明治時代の卒業写真(郷土出版社)



大正時代の卒業写真(郷土出版社)

三号校舎についての、外観は和洋折衷建築の風格を思わせる造りとなっている。

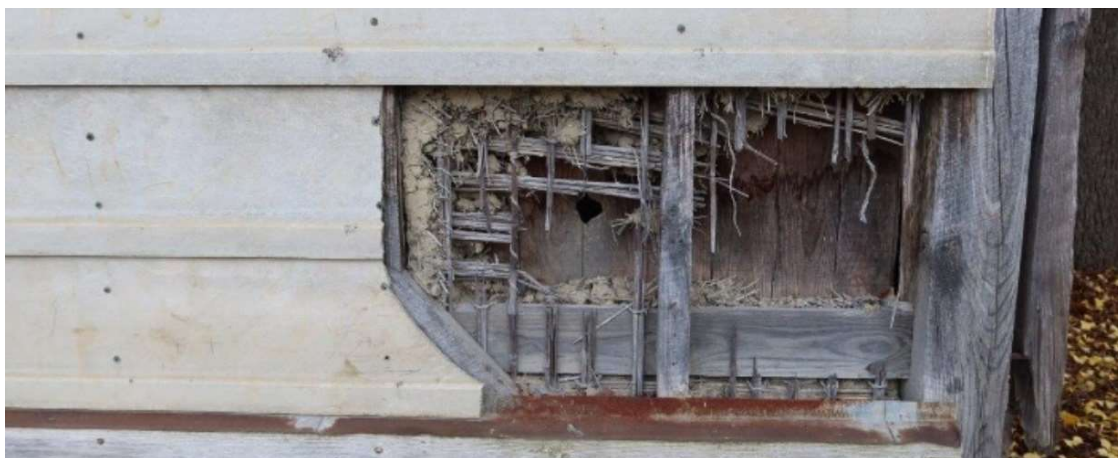
ここで日本建築学会に投稿された「東京私立小学校木造校舎の設計規格」という論文で述べられている、1冊の書籍から考察できることを記してみたい。

「高等建築学(学校)」常盤書房 昭和10年(1935)には、平面計画、校舎構造大要、軸部構造の項目に分けられそれぞれの内容が記されている。平面計画については、文章として示されていないようだが、図面が示され、その中で普通教室平面の大きさについて、桁行9.0m×梁間6.6mそして、廊下幅2.4mとした図面が記されているようである。梓小学校三号校舎は、平面図より桁行9.1m×梁間7.28mそして廊下幅については3.64m(前述書籍、梓小学校共に芯々の寸法)となっている。教室については書籍に記されているサイズより若干大きい程度だが、廊下幅については、1.2m以上も大きく当時の校舎としては、幅の広い廊下であったことがわかる。

校舎を使用していた女性も子供ながらにもとても大きい廊下であることを認識されていたようだ。ただし学校生活の中で、この幅の広い廊下で学習や集合行為があったわけでは無く、一般的な廊下の使いであったようだ。以前は中学生が使用していたことも影響していることも考えられる。

また、校舎構造大要として記されている内容として、校舎の外部仕様について述べられているようだ。その内容は、「床 米松、ブナ等の板張り。内外木部仕上、総体に油性ペイント塗り。屋根 石綿セメント板一文字葺。外壁 石綿セメント板又は木造下見板横張り」と記されているようだ。ここで、三号校舎の仕上の仕様を考えた時に屋根は、瓦葺きとなっているが、木部の油性ペイント並びに、外壁材の石綿スレート板は、書籍に記されている仕様に、まさに合致してくる。設計規格の趣旨として、石綿スレート板を外壁に多用したことは、耐火の為の対策を徹底するために用いられたようだ。このスレート材が現状で一部破損しており、そ

の下地状況が現場で確認することができた。スレート下には竹により木舞が組まれ土壁が施されていた。おそらく当時の断熱材として施されたと思われる。



スレート板下地の状況

また内外部に施されて板張りは当時から油性塗装が施されていたと上記からも推測される。

現在の内部は、用途を工場とするために変更工事が行われている。その為、1階の一部廊下と教室の間仕切りは柱を残して撤去されている。その他柱も一部鉄板や鉄骨による補強が行われている。

1階廊下の天井は2階床梁を補強するために当初より施されている火打ち材を隠すための一部傾斜天井となっている。1階の教室内部についても両脇に火打ち材を隠す目的にてほどこされたと考えられる傾斜天井となっている。後述する新校舎の図面では、1階の教室床梁が鉄骨材とされていたが、三号校舎の時代は床梁が木材で架構されていたと考えられる。

外部に露出していた基本的な柱は、135 mm×135 mmとされこの時代の校舎における柱としては、一般的な柱太さと考えられる。



現状の北側柱にて計測

2階から教室を確認すると廊下と同じ梁を補強する火打ち梁があるであろう部分に合わせて天井の両袖が傾斜天井となっている。

廊下と教室の間仕切りは、開放性が高いガラスの引違い間仕切りが施されていた。



2階の天井高さについては、廊下が3.2mほど、教室内部で4.3m以上の天井高があり、この時代さらには、現代の教室と比較しても天井高の高い校舎となっていた。

油性塗装については、当時のままかは不明だが、教室内部は、白系統(白やグレーなどの)で統一され、廊下については、天井のみ白い塗装とされ、廊下と教室を明確に色で分けていた。

北側、西側に増築された部分は工場として使用されるために、当然ではあるが、現代的な鉄骨造の合理的な造りとされていた。



イ 新校舎 昭和 37 年(1962)建設 令和 3 年(2021)解体

新校舎は三号校舎の 25 年後に建設された。現存しないが、設計図面が残されていた為、三号校舎との比較の為に図面より建築的特徴を考察する。

新校舎は三号校舎と同じく北側廊下の普通教室棟であった。

外観については、屋根形状を切妻屋根の外壁をワイヤラスモルタル刷毛引きスプレー仕上とし、三号校舎とは異なり、1 種類の仕上げとして、板張りなど数種類の素材を使用せずに合理化した仕様となっている。

構造的には、木造 2 階建ての校舎として大空間を確保するための工夫が施されている。まず屋根をトラス小屋組み（キングポストトラス）とし、24 尺≒7.27m の教室スパンと 9 尺≒2.73m 廊下のスパンとされている。教室 2 階の床を支える梁は鉄骨のラチス梁として、屋根よりも多くの荷重を支えることとなる 2 階の床を支えている。また、9 尺≒2.73m スパンの廊下は教室のスパンより短いために、鉄骨梁ではなく松梁の両サイドに方杖を施し木材の梁を補強することで経済的な梁の設計が施されている。また、2 階床の鉄骨梁の接合部には木材の梁で受け材を施し鉄骨を木材でしっかり受ける仕組みを構築している。また方杖の部分にもボルトで梁若しくは柱にしっかりと固定されている。

柱は前述の鉄骨梁を支えるために一部 2 本抱き合わせの柱となっている。

教室の天井は切妻形状の勾配天井とし、廊下は格子形状の竿縁天井であったと読み取れる。教室、廊下間仕切りの欄間はガラス引き違い戸とし、足元にはフラッシュの引き違い戸とされ、その中間に掲示板とされていた。

校舎としての造りは北側片廊下のシンプルなものであったが、構造的、使用方法に対応するための作り方には工夫がなされていたことが伺える。設計図の内容からすると、昭和 12 年(1937)建設の第三校舎よりも技術が進みより合理的な造り方を試みられていたことがわかる。

昭和 37 年 5 月 1 日の梓川村公民報は、以下の記述がある。

「梓小の新校舎落成 クリーム色の明るい校舎に 総工費約 1,500 万円」

校舎延面積 1,027 m²、便所 47 m²、渡り廊下 111 m²で総計 1,185 m²の二階建十教室のうち四教室は一部古材を使用して総工費 14,999,000 円で三郷村一日市木材が請負で工事に当たりました。

新校舎の外装はクリーム色、内部は温かみのあるやわらかい色で仕上り整理棚などを付けた明るい感じの建物で校舎の南側に幅 2.7m のベランダが作られ学習に都合が良いことや教室内の天井が高く吸音設備がつけられ、カーテンのかわりにルーバー（日よけ）が付き教室内部が非常に明るくなっています。

ここから、梓川村の隣、三郷村の会社が請け負ったことや、第三校舎に使用されていたスレート板に代わり外壁にモルタルを施し、耐火性を確保し、見た目にも明るい外壁が目立っていることが伝わる。また、昭和 22 年(1947)以降、鉄筋コンクリート造校舎の建設が広がっていくが、日よけのためルーバー採用されており、全国に普及が進むなかでこの校舎にも取り入れられたと思われる。なお、昭和 27 年(1952)にはモデルスクールとして松本市丸ノ内中学校（設計：大西幸雄）にも、ルーバーが採用（現在は改修により撤去）されている。（参考文献：戦後モダニズムの学校建築 2024）

三号校舎は前述したようにおそらく、東京市で定められた木造小学校校舎設計規格がベースにありそれを独自の工法でつく上げたものだと思われる。また、丸ノ内中学校の設計者である大西幸雄は東京市における大半の木造小学校校舎の設計において関わっていた人物であるようだ。

現代のような情報社会ではない時代に、長野県の松本市や、こと梓村においては、この時代において日本の中心である、東京より情報や技術を用いて最善の校舎を建設する試みが行われていたと考えられる。

5 建設関係者

(1) 第三校舎

設計者：久保田土木建築事務所 主任 久保田正吉、渥美馬治

現場監督：北原貞明

製材：降幡崑内、武居傳一

大工：田多井儀一、川村壽春、平林篤雄、輪湖泉

金物：原鉄工場 上條金物店

瓦屋根：原口奥蔵

スレートテツキス：石田建材株式会社 福島屋

鋳（かざり）職・土居葺：百瀬亀鶴、野内壽恵市

建具職：佐久間榮吉、上兼利市、三村喜久次、降旗亀久雄、西牧喜十、西牧政市、
岡村梅吉、二木福美、萩原貫市

床板：山崎木工所

硝子：辺見源逸

鳶職：中村三男人、中沢常市

ペンキ：安保民雄

工事費 校舎新築費 3,600 円 総工費 7,650 円 寄付金 912 円

工期 昭和 12 年(1937)8 月 1 日から 12 月 8 日

「昭和 11 年度小学校建築関係綴」昭和 11 年より

設計者は、飯田市鈴鹿町の事務所である。施工者は、昭和 10 年当時は工事を一つの会社が請け負うのではなく、それぞれに発注していたと考えられる。

(2) 新校舎

設計者：不明

施工者：一日市木材株式会社（南安曇郡三郷村 現：安曇野市三郷）

6 まとめ

旧梓小学校は、明治 43 年（1910）に最初の校舎を完成させ、その後、時代の変化や生徒の数の増加に対応するために増築などを繰り返した。三号校舎の建設時期である昭和初期当時の梓や立田を知る人からは、県道沿に商店が立ち並び、村として景気が良くとても元気のある地域であったと聞く。

それは恐らく昭和初期だけではなく、沿革にも述べたように一号校舎が県下稀にみるほどの大規模建築であったことから、この地域は一号校舎、二号校舎等が建設された明治後期も地域として繁栄していたことが窺える。

そのような背景から梓村にとってのシンボルとして、村の繁栄を表現するかのよう立派な校舎を建設したと想像する。

現存する最後の三号校舎は、昭和 48 年(1973)まで校舎として利用され、旧梓川村では、昭和 36 年(1961)より梓川村工場誘致条例が制定されたことに伴い、平成 9 年(1997)まで工場として活用された。その他、昭和 37 年(1962)に新築された新校舎は、閉校後に民俗資料館、その後に民俗資料館としても利用され、後に解体された。この校舎群は、地域における子供の学び舎としての建築だけではなく、地域の産業や歴史を支える一端も担った。

時代の変化に伴い建築技術も進歩し、様々な大規模建築が現れた。最後に残された三号校舎も誕生して 90 年余りの歳月が流れた。これまでの歴史としての資料や、卒業生からの話を聞くことで、当時のシンボルとなる建築として誕生し、旧梓川村の中で皆に愛された建築として把握することができた。この歴史、事実を確認したうえで、この役目を終えた建築に対して感謝し、大規模木造校舎として歴史の資料として後世に引き継がれることを切に願う。

7 参考文献

- ・『写真資料で見る 梓・倭小学校教育の歩み』
当時校長 降旗寿一郎(編集) 形式統合梓川小学校(発行)
昭和 48 年 3 月 31 日発行(1973)
- ・『長野県の学校』
信濃教育会出版部 代表太田美明(編集・発行)昭和 58 年 3 月 5 日発行(1983)
- ・『梓川村誌 続編』
梓川村誌編さん委員会 委員長倉科昭(編集) 平成 11 年 3 月 20 日発行(1999)
- ・『梓川村公民報』
- ・梓川村誌 歴史編
- ・戦後モダニズムの学校建築 令和 6 年 2 月 29 日発行
- ・長野県の学校 社団法人信濃教育会出版部
- ・南安曇郡誌 第三巻下
- ・『写真で見るこころの松本』 小松芳郎(監修) (株)郷土出版社 平成 26 年(2014)
- ・日本建築学会論文『東京市立小学校木造校舎の設計規格』
藤岡洋保 藤川明日香 平成 11 年(1999)

8 写真

(1) 資料より



明治 42 年 8 月 12 日(1909) 梓小学校一号校舎棟上げ風景写真(郷土出版社)



梓小学校前で(梓川村・昭和10年代) 校庭の整地作業であろう。土砂を運ぶトロッコが通るレールもある。
昭和 10 年代 校庭から二号校舎側を見る(郷土出版社)

(2) 調査時 以下三号校舎



三号校舎 南側



三号校舎 北側



三号校舎 東側



三号校舎 西側



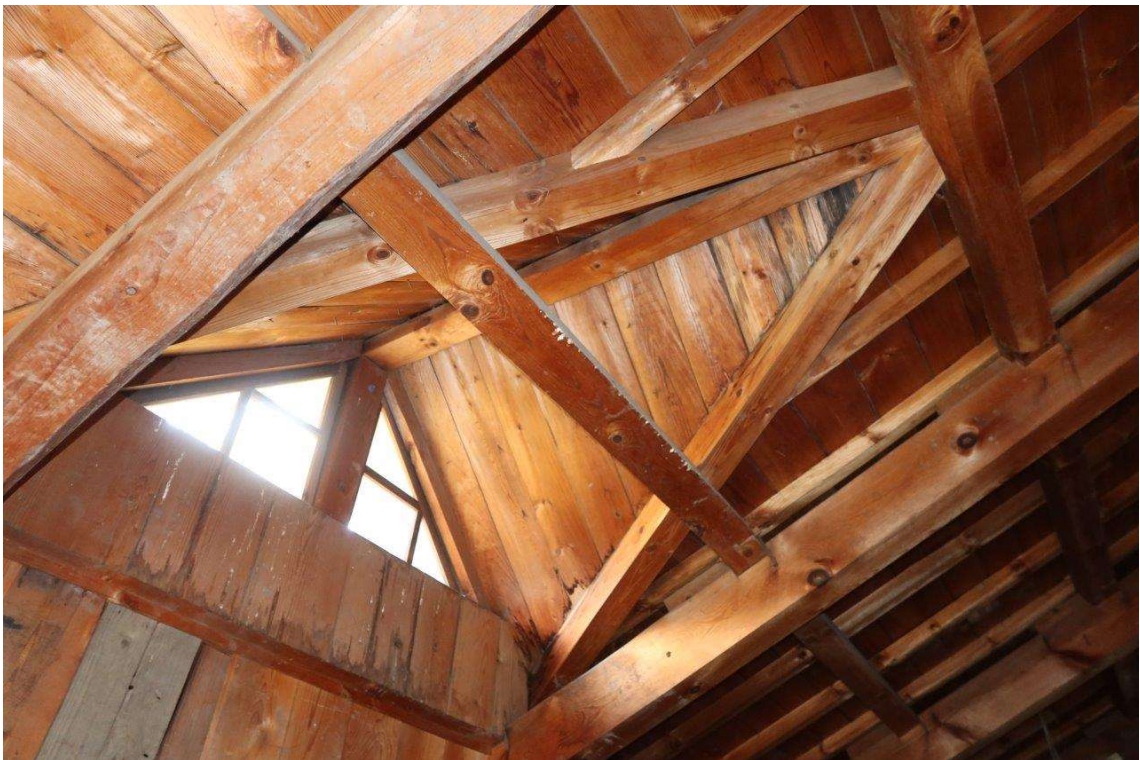
2階 教室



2階廊下



西面 ハイサイドライト



ハイサイドを内部から見る



階段 以下階段の詳細写真





2階廊下鉄骨にて補強された部分いつの時代のものかは不明



2階廊下



2階廊下天井



西昇降口上部



南昇降口と西側端屋根



1 階教室（工場として利用された）



1 階教室（工場として利用された）



1 階廊下



1 階教室から廊下側を見る

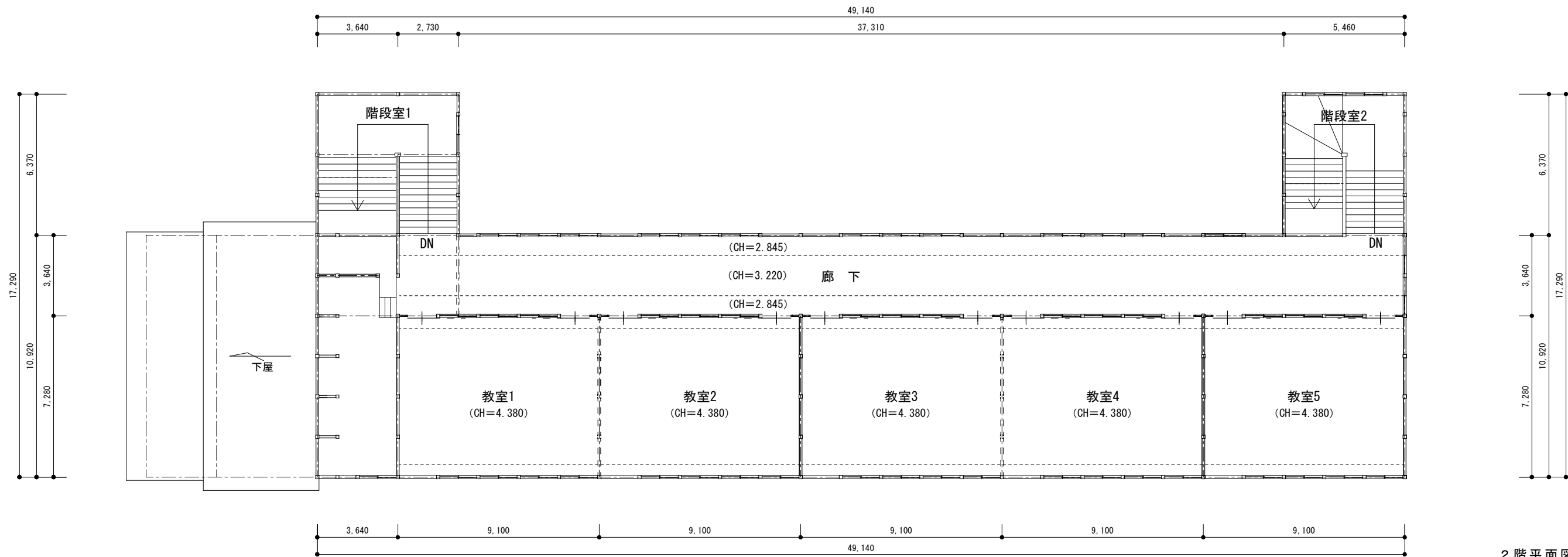


北側に増築された部分

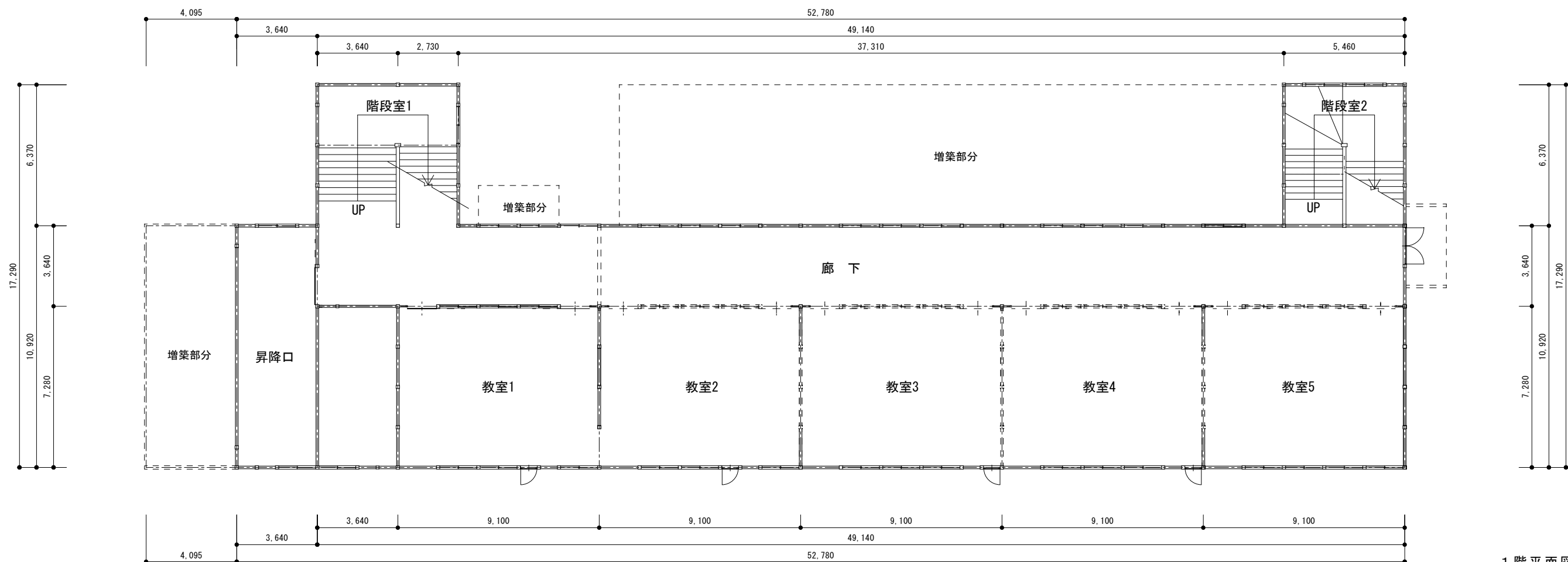


西側に増築された部分

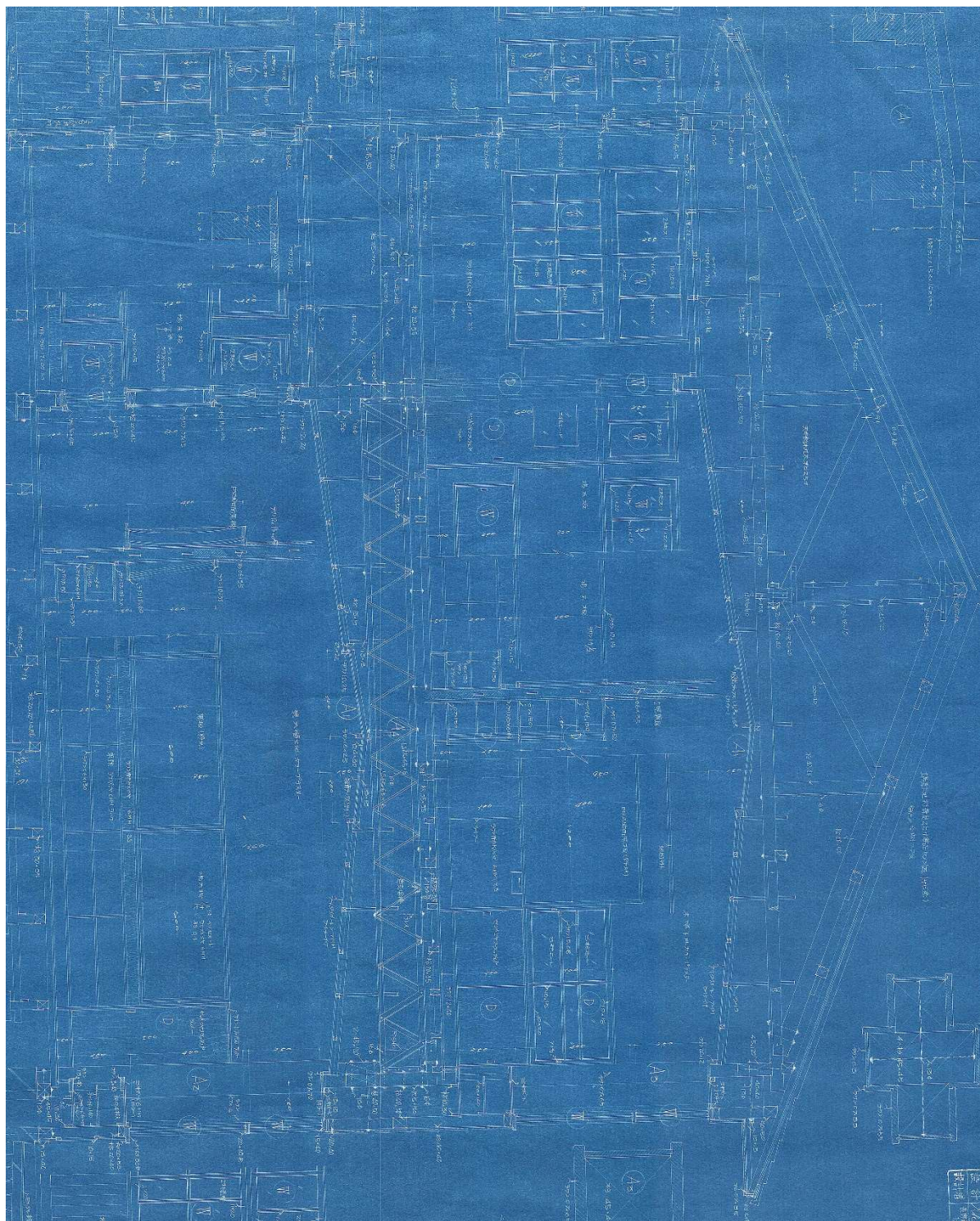
図面



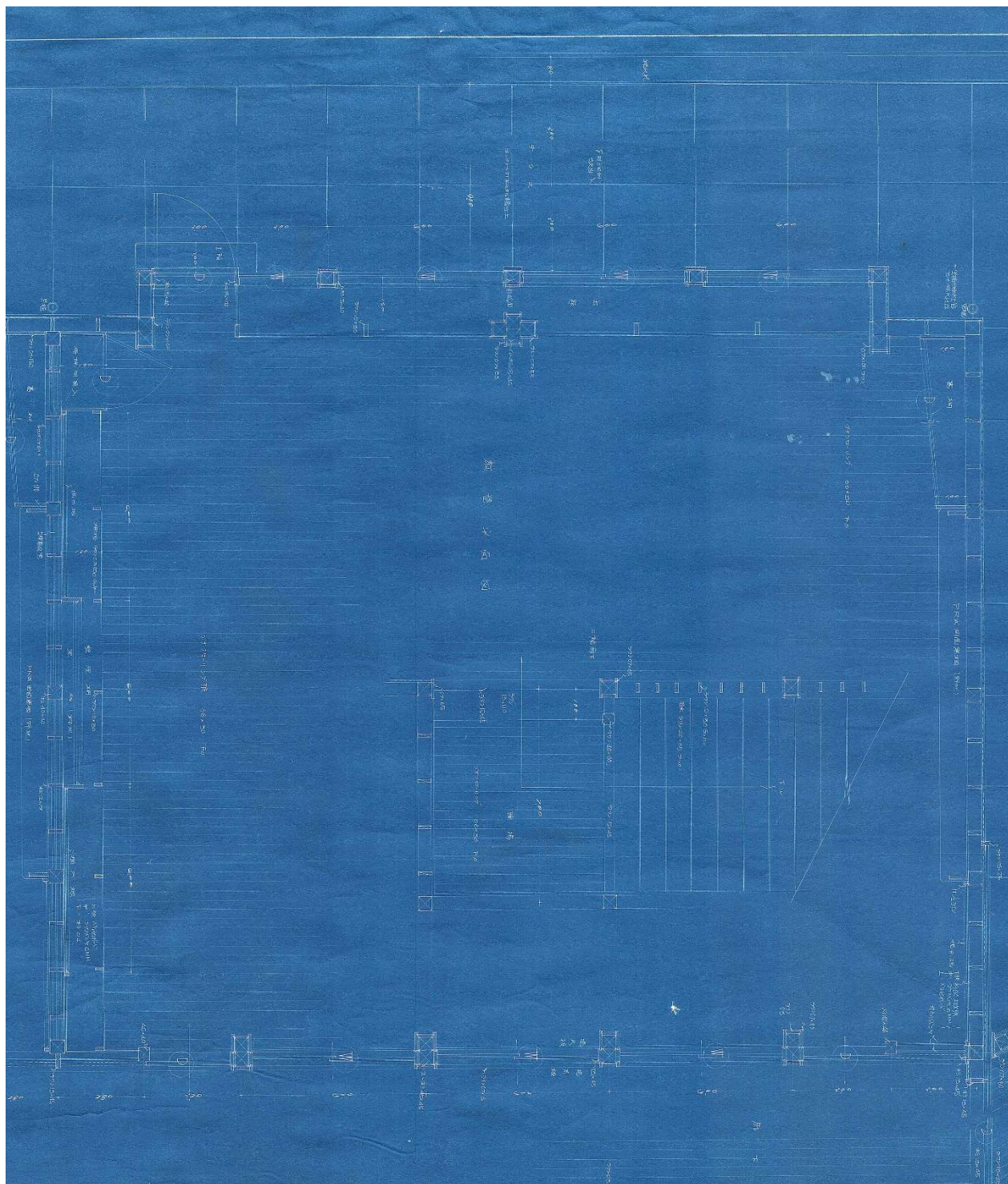
2 階平面図



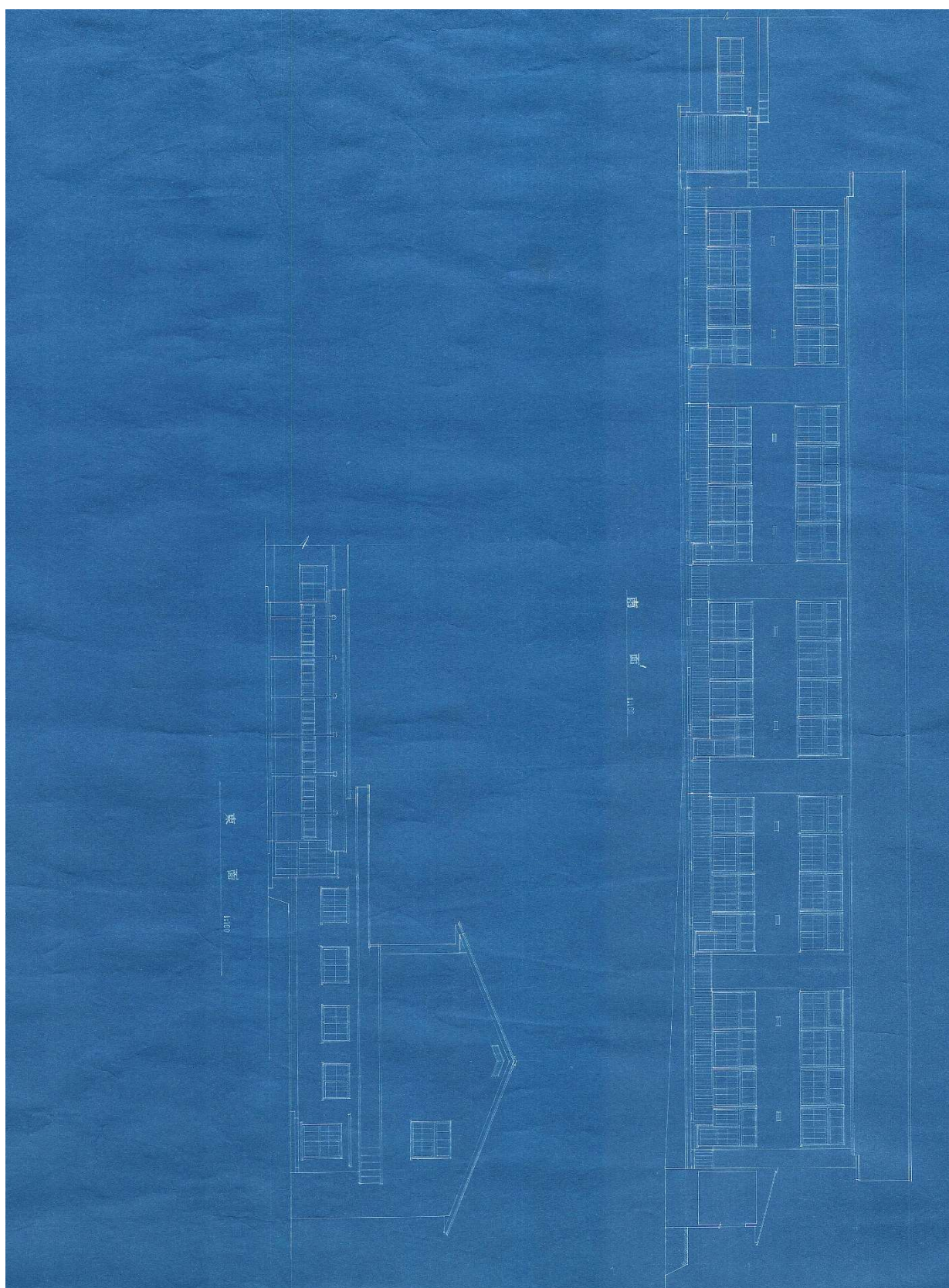
1 階平面図



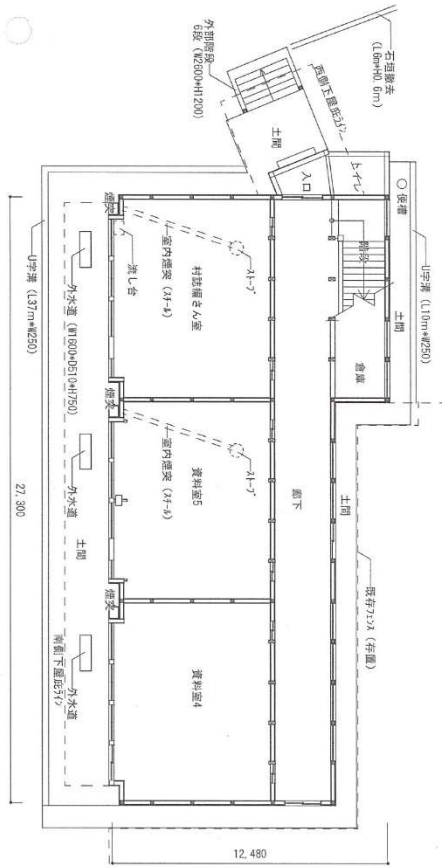
昭和 37 年(1962)完成の新校舎 矩形図



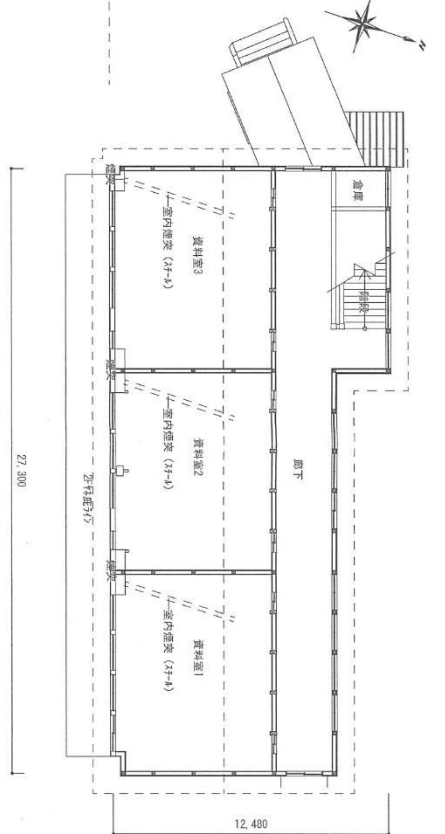
昭和 37 年完成の新校舎 平面詳細図



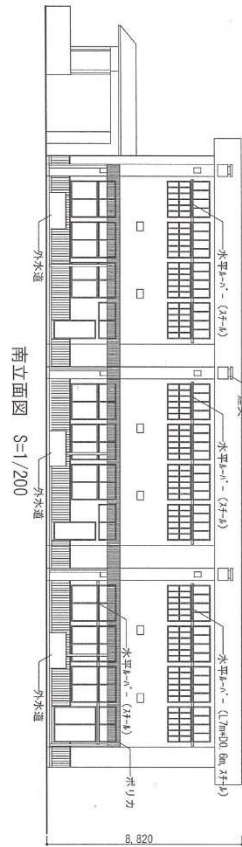
昭和 37 年完成の新校舎 立面図



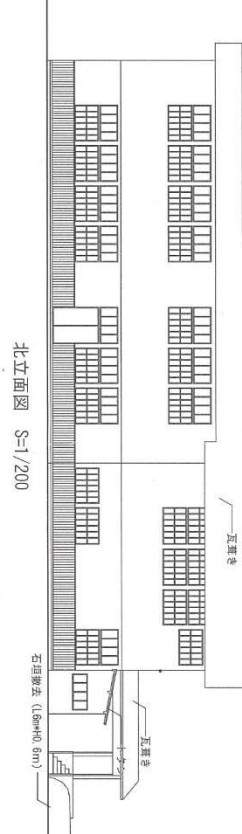
1階平面図 S=1/200



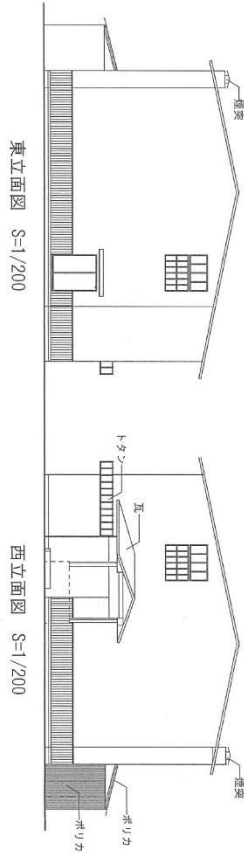
2階平面図 S=1/200



南立面図 S=1/200



北立面図 S=1/200



東立面図 S=1/200

西立面図 S=1/200

口仕上表		口面積表	
部位	内容	面積	備考
外壁	瓦葺き	312.5 m ²	
屋根	瓦葺き	599.3 m ²	
床	フローリング	304.1 m ²	
天井	石膏ボード	285.2 m ²	
窓	ガラス		
扉	木製		
その他	その他		

新校舎解体時の図面（解体工事より）



新校舎解体時南（解体工事工事写真より）



新校舎解体時北（解体工事工事写真より）



新校舎解体時南（解体工事工事写真より）



教室 2 階内部 天井下地、壁筋交い、間柱の状態（解体工事写真より）



教室 1 階内部 床を支える鉄骨梁（解体工事写真より）

奉上棟 天御中主尊（あめのみなかぬしのみこと）

裏には棟上げが明治 42 年 10 月 10 日

大工棟梁、建方、石工、土工、瓦師、建具らの名前が書かれている

10 月 10 日に素築、翌年、明治 43 年 4 月 5 日 梓川尋常小学校として開校

<p>明治四拾貳拾月拾日吉祥</p>		<p>大工棟梁</p>	
<p>曾根□□ 曾根□□ 輪湖□次郎 曾根□□ 曾根□□ 森崎□次 山平内□</p>	<p>曾根□□ 曾根□□ 曾根□□ 曾根□□ 曾根□□ 森崎□次 山平内□</p>	<p>建方 小澤□□ 山崎□□ 上原□司</p>	<p>石工 高橋□□ 土工 森島武雄 □□六郎</p>
<p>加藤□次郎 建具 高橋金平 瓦師 □倉□□ □倉□□</p>	<p>野口清一郎 敬白 敬白 敬白 敬白 敬白 敬白 敬白</p>	<p>野口清一郎 敬白 敬白 敬白 敬白 敬白 敬白 敬白</p>	<p>野口清一郎 敬白 敬白 敬白 敬白 敬白 敬白 敬白</p>